様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２８２４

研究課題名（和文）「移動して学ぶ」時代の日本語教育ー留学体験の意味づけの変容・維持過程の分析からー

研究課題名（英文）Japanese Language Education in the Era of "Studying in Locomotion": By Analyzing Forms and Maintenance of Meaning of Study Abroad Experience

研究代表者
丸山　千歌（MARUYAMA, Chika）

立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授

研究者番号：３０３２３９４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：複線径路・等至性アプローチを採用し、調査協力者4名の径路と、その共通点や相違点を分析した。調査の結果、以下の３点が明らかになった。１）「日本で生きて行こう」と思う前の段階に「日本でやっていけるという確信を持つ」段階があり、これがObligatory Passage Pointとして存在する可能性が高いこと、２）日本語力がSocial Guidance、として存在している可能性があること、３）「深い経験づけ(Deep Experiencing)」を踏まえた分析が有用である可能性である。研究成果は、論文、また国際学会での口頭発表で報告した。さらに本研究に続く研究課題の設定も行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
移動しながらの学びに期待されるのは、グローバルな観点から、「21世紀型スキル」を持った人間を育てることであるが、もう一方には、ローカルな観点から、「現地を知っている」「現地に通じる」人間を増やすこと、日本で言えば「知日派」の育成である。日本留学を経て母国の大学を卒業し数年以上経過している日本留学経験者自身が、日本留学体験・日本語学習体験をその人生の中でいかに位置づけているか、その位置づけの変容を通時的な視点でとらえることが生じたが、この課題に応えることは、冒頭で述べたグローバルな観点とローカルな観点の両方を持ち合わせた日本語教育の可能性を示すことにつながる。

研究成果の概要（英文）：By adopting the Trajectory Equifinality Approach (TEA), this study investigated four participants' trajectories as well as similarities and differences among them. As a result, the research found the following three. 1) It is very likely that a stage of "having confidence in living in Japan" before the one thinks "I'm going to live in Japan" exists as an Obligatory Passage Point (a point that must be passed through to move to a certain point). 2) The Japanese language skills may function as Social Guidance (a power for assistive work towards EFP). 3) "Deep Experiencing" (Lehmann & Valsiner, 2017) is worth to consider in the analysis. These were reported in papers and oral presentations at international conferences, and researchers set a research plan for the next stage of this study.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語学習者　日本留学　日本語授業　PAC分析法　TEA

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

1985 年のヨーロッパにおけるエラスムス計画の提案から 35 年が過ぎようとしているが、この間日本でも 1995 年から国立大学で半年から１年の交換留学が盛んに展開され、さらには数週間レベルの長短期留学プログラムも数多く展開されるようになり、若者が世界中を移動しながら学び成長する姿が自然な形として受け入れられるようになっている。こうした移動しながらの学びに期待されるのは、グローバルな観点から、「21 世紀型スキル」（三宅他、2014）を持った人間を育てることであるが、もう一方には、ローカルな観点から、「現地を知っている」「現地に通じる」人間を増やすこと、日本で言えば「知日派」の育成である。

研究代表者らは、日本語教育は、学習者にとってアクセスしやすい形で、この両方の観点を持った教育が提供できる、ポテンシャルの高い分野だと考え、これまで学習者の視点、特に日本語学習者が日本語教科書とどのように向き合っているかという学習者個人と教材とのインタラクションの観点から、教材作成や教材選定、授業運営への提言につなげるための研究を行ってきたが、一連の研究から得られた知見から生まれた新たな課題として、日本留学を経て母国の大学を卒業し数年以上経過している日本留学経験者自身が、日本留学体験・日本語学習体験をその人生の中でいかに位置づけているか、その位置づけの変容を通時的な視点でとらえることが生じた。この課題に応えることは、冒頭で述べたグローバルな観点とローカルな観点の両方を持ち合わせた日本語教育の可能性を示すことにつながる。

２．研究の目的

本研究課題は、『ＰＡＣ分析法を活用した学習者が日本語教材から受ける影響と学習者要因の解明』（平成 19 年度-21 年度基盤（C）課題番号 19520449））の発展的課題として、日本での留学経験・日本語学習を経て大学を卒業し、現在仕事や研究を通じて日本社会と関係を持ち続けることを選択して数年以上経過している日本留学経験者にまず対象を絞り、日本での日本語学習や経験が、日本留学経験者には、どのように意味づけられているか、その意味づけは時間の経過とともにいかに維持・変容しているのか、その変容に影響を与えているものは何かを考察する。

３．研究の方法

本研究課題は、個人別体動構造分析（PAC 分析法）と、人間の成長を時間的変化と文化社会的文脈との関係の中で捉え、記述する方法論的枠組みの複線径路・等至性アプローチ（TEA）を採用した。TEA では、調査協力者へのインタビューを、下に示す EFP、OPP、SD、SG 等の観点を取り入れて TEM 図を作成し分析を進める。TEA では対象者が１人ならばこの豊かさ、4±1 ならば多様性、9±1 ならば類型化が得られるとされていることから、対象を 4 名に絞り、各調査協力者の経路を明らかにした上で、共通点や相違点を分析した。

４．研究成果

一連の調査・分析により得られた主な知見は以下の３点である。

（１）　想定した EFP（Equifinality Point、ある定常状態に等しく辿りつくポイントとして、研究当初に研究者が設定したもの）と異なる 2nd EFP（インタビュアーとのやりとりの中で把握された等至点）を得た。

（２）　４名の TEM 図を重ねて分析した結果、「日本で生きて行こう」と思う前の段階に「日本でやっていけるという確信を持つ」段階があり、これが OPP（Obligatory Passage Point、ある地点に移動するために必ず通るべきポイント）として存在する可能性が高いこと、また、

日本語力がSG（Social Guidance、EFPに向けて援助的に働く力）として存在している可能性があることを確認した。

（３） TEA の理論的基盤構築を牽引する文化心理学者の一人である Valsiner が近年唱えた「深い経験づけ(Deep Experiencing: DE)」（Lehmann & Valsiner, 2017）に着目し、この４名の径路におけるDEを「対話的自己」（安田他、2015）という観点から考察する必要性を明らかにした。

これらの成果に基づき、今後は研究成果②のOPPについて、DEの観点を用いた詳細な分析と、上述のTEAの理論に基づき対象を9±2人に広げて類型化を目指すことが期待される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 丸山千歌・小澤伊久美	４．巻 2
２．論文標題 日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触ー日本に住み、働きつづける日本留学経験者Bの場合ー	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本語・日本語教育	６．最初と最後の頁 19－38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 丸山千歌・小澤伊久美	４．巻 1
２．論文標題 ある翻訳者が自立に至る経緯-移動して学ぶ時代の日本語教育への示唆－	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本語・日本語教育	６．最初と最後の頁 19-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 丸山千歌・小澤伊久美	４．巻 3
２．論文標題 日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触　－日本に住み、働きつづける日本留学経験者Dの場合－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本語・日本語教育	６．最初と最後の頁 13-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 丸山千歌・小澤伊久美
２．発表標題 日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触ー日本に住み、働きつづける日本留学経験者Bの場合ー
３．学会等名 ヴェネツィア2018年日本語教育国際研究大会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 小澤伊久美・丸山千歌
２．発表標題 留学体験を持つ日本語学習者Xが日本に住み、働き続ける径路ーXは分岐点でどのような葛藤を経験しているかー
３．学会等名 沖縄日本語教育研究会第16回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 小澤伊久美・丸山千歌
２．発表標題 留学体験を持つ日本語学習者4名が日本・日本語に関わり生きる径路ー複線径路・等至性アプローチによる分析ー
３．学会等名 CAJLE2019年年次大会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小澤伊久美・丸山千歌
２．発表標題 日本語学習者Xが日本に住み続けることを促進・抑制する記号ーXの「深い経験づけ」としての留学経験の分析からー
３．学会等名 日本質的心理学会第16回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 徐敏民・丸山千歌	４．発行年 2018年
２．出版社 復旦大学出版会	５．総ページ数 382
３．書名 新界標日本語　総合教程	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小澤　伊久美 (OZAWA Ikumi) (60296796)	国際基督教大学・教養学部・講師 (32615)	